



野田連句会会報

# あぜりあ

第七号

平成 26 年 7 月 15 日  
発行 (季刊)  
発行人/編集人  
松澤龍一  
(野田市野田 665)

## 半歌仙「メーデー」の巻 渡部春水 捌

メーデーや食パンだけの昔あり 渡部春水  
のどけさのなか錆びた飛行機

諸藤留美子

百千鳥言葉をまねるものもいて //

じゃんけんぼんで登る石段 松本八重子

望の月揺れる漁船に皓皓と 青山満子

白磁に活ける秋の七草 留

ウ

バンジーで粧う山へ大ジャンプ 留

黄色い声の湧きし吊橋 八

手をつなぎ胸のときめき押さえかね 満

ひっきりなしに聞のため息 八

後朝の三叉路を行く乱れ髪 満

出自暴かれ呷る安酒 春

ワイキキの耶子の葉騒に夏の月 留

大聖堂に響くオルガン 満

ロボットに介護を受ける日の間近

一足す一は五にも六にも

蒼穹に花びら高く舞いあがり

地の息吹知る踏青の靴

執筆

平成二十六年五月一日首尾  
野田市市民会館

## テルツァ・リーマ「大きな手」

メーデーに繋いだ父の大きな手

松澤龍一 a

お玉杓子の遊ぶ行列 市川唯子 b

潮干狩抱かれた犬の頭まで 成島静枝 a

半熟卵のせたオムレツ 白石一有 b

鷗尾を越え端正の月皓々と 有 c

猪の狩場は追いつ追われつ

木之下みなみ b

街路樹の落葉に悩む東京都

強化対策急げ五輪へ み d

ハイヒール初めて履いた鬼姑

唯 c

戸籍原簿に知らぬ童 わらんべ み d

オピウムをこっそり袂に潜ませる 龍 e

死んでくれたらいつそよかんべ み d

早曉の黒門市場鱧を競る 有 e

イギリス人の汗の鉛筆 唯 f

両陛下の伊勢参拝に居合わせる 静 e

古代遺跡に鮫と屍櫃 からみつ み f

花筏割って田舟のゆうらゆら 龍 g

影の朧に蒼き静謐 有 f

名物の海胆は採りたて漁港由良 執筆 g

平成二十六年五月一日首尾

野田市市民会館

(注)

押韻形式は aba/bcb/cdc/ded/efe/fgf/g

鷗尾(しび) 古代の瓦葺宮殿、仏殿の大棟の両端に取り付けられた装飾。

オビウム イブ・サンローランの香水、阿片の意。屍櫃(からひつ) 棺、ひつぎ

由良 淡路島の中央南東部に位置する漁港。

(留書) また、テルツァ・リーマに挑戦した。

押韻は難しい。逆引き広辞苑は必携である。四連の一句目と三句目は三連の二句目の「五輪へ」を受けて「んへ」或いは「んべ」と韻を踏まなければならない。超難問である。みなみさん、一句目は「わらんべ」と軽々と付け、三句目は「よかんべ」と野田弁を出した。お見事でした。(龍一)



半歌仙「梅雨の入り」の巻 渡部春水 捌

駅までの道の重たき梅雨の入り 渡部春水

十字切りたるどくだみの白 青山満子

ラムの香のベーカリーより流れ来て

小林俊子

上り框で出迎える猫

白石一有

文机にもたれ眺める望の月

棋譜たどる間に背ナの冷やか

海原を乗り越えて来し鼻曲鮭

どどこまでもついて行きます

隠れ湯の宿帳の欄妻と書き

年増の技に武骨解かれ

縄梯子踏み外したる影法師

観音菩薩崖に微笑み

月凍るT P Pの難航し

車座になり地酒熱燗

ブレヒトの三文オペラ幕を開け

紋白蝶の舞いつもつれつ

父母の面影浮ぶ花の雲

東葛の野に追いつ逃水

平成二十六年六月五日首尾

野田市市民会館

半歌仙「幹赤々と」

老松の幹赤々と梅雨の入 木之下みなみ

皐月波寄す白い燈台

我土偶ほほ笑む孫に腕ひろげ

カーテンコール三度四度と

満月へ竹人形の跳ぶ構え

柴の折戸に蟋蟀の鳴く

太刀魚は水族館に発光し

雨宿りして肩を触れあう

一目惚れさせた男を膝枕

必死に隠す昨夜の噛み痕

嫩(うわなり)を嬲(なな)る姑と小姑と

デジャビュの街で猫の写真を

交番の前に集まる寒鴉

東京砂漠木枯しの月

騒がれたスタップ細胞幻に

青饅で酌む地酒一升

名刹の鬼瓦にも花吹雪

熱きを語る憲法記念日

平成二十六年六月五日首尾

野田市市民会館

(注) 嫩(うわなり) 後妻



半歌仙「梅雨の門」の巻 渡部春水 捌

梅雨の門賓客の影まといけり 渡部春水

夏の燕の飛ぶは低空 諸藤留美子

遠方の友の個展に誘われて 志田則保

粹に着こなすブランドの服 則 留

満月の静かな湖へかかる橋 留 留

銀杏黄葉の波紋広がり 笈沼早苗

ウ 町内の運動会の人気呼び 留

市長候補の愛想振りまく 則 留

女子会にアッシー君という参加 則 留

シャンペンタワーで熱い告白 留 留

隠れ宿敏腕刑事突き止める 早 留

判読難き江戸の古文書 春 留

能舞台世阿弥を偲ぶ冬の月

竈の猫の寝息かすかに

望郷の北方領土見ゆる丘

祈りを込めて放す風船

石垣に疵痕残る花の城

琴の調べの春風に乗る

早

留

則

早

春

執筆

平成二十六年七月七日首尾

野田市市民会館

エッセイ 小野田さん、安らかに

木之下みゆき

「人を何人も殺めて、あなたには罪悪感はなかったのですか。」一人の若い女性であった。聴衆の感動の坩堝を打ち砕くように、その女性は、はつきりと強い口調で、いきなり斬り込んで来た。

その日、我が家の菩提寺で、小野田寛郎さんの講演があるというので出かけてみた。小野田さんといえば万人周知、三十年潜伏されていたルパン島からの帰還兵。昭和四十九年三月十二日、帰国のニュースは日本中を駆け巡った。一緒にテレビを見ていた母は、う

つすらと涙を浮かべ、「長い間ご苦労さまでした」と、深々と頭を垂れた。

その小野田さんに遭えたのだ。本堂は溢れんばかりの聴衆。坐像の親鸞聖人に目礼をされ、聴衆の面前に立たれた時、思わず息を呑んだ。

今まで見たことのない人間の眼光であった。その光は澄んではいるのだが、怖ろしいほどに静かで鋭く、日本刀のような光を放っていた。帰国から三十年以上も経っているのである。潜伏中、百数十回の戦闘を繰り返すうちに、十キロメートル先の敵の動きや僅かな葉っぱの動きまで見えるようになり、敵の銃弾を避けてこられたのだとか。

三十年間の極限状態での暮しは、衣・食・住のどれをとっても想像を絶するすさまじいものばかりだった。敵の動きの他に、小野田さんが一番恐かったのは、何日も続く雨だったらしい。ジャングルには雨を凌ぐ家がないのである。それまで考えたことも無かった。人間以外の動物は根本的な精神力と、生命に対する危機管理能力を持っているのだと話されたときはもう、極限状態とはと、ほんの

少しも理解できるものではないと、つくづく戦争の悲しさを思った次第である。

講演が終わり、呆然としてしていると冒頭の女性が問いかけたのである。小野田さんは少しもたじろがず、静かに答えられた。「あなたね、毎日が殺すか、殺されるかですよ。むざむざと敵に殺されたいですか？それが戦争なのです。みんな、精一杯戦っていたのです。今の感覚と価値感で物事を判断してはいけませんよ。」小野田さんのこの一言は私の胸を大きく抉ったが、冒頭の女性も大きく頷いていたので皆ほっとした。と同時に、いい質問をしてくれたと思った。私たちはややもすると、現代の感覚を優先して物事を思考するきらいが有る。一情報将校として、生と死の狭間で平和と戦争を見つめ、数奇な人生を送られた小野田さんは、この一月に天国へ向かわれた。最後の最後の日本兵だった。(「現代俳句千葉」112号より転載)



(多くの方々から激励のお言葉を頂戴しております。)

●「野田連句会通信」有りがたく拝読いたし

ました。皆々様格段のご上達で喜ばしく存じます。時には二ヶ月かけて歌仙も詠んでみたいですね。(KKさん)

●「あぜりあ」五号の「初東風や」の巻は良いですね。初懐紙としての初々しさに溢れ、小気味の良い半歌仙となつていると感じました。「立冬や」の巻、裏の2句目、3句目ですが、龍一さんの付け句が、「ブラウスの衿」から「胸に顔埋め」があまりにも近すぎないかと。「震災忌」の留書ですが、「校合」が「交合」となっており、あれまと思えました。(TTさん)

●「あぜりあ」五号ありがとうございます。良き世話人、良き編集人を得て着々とご発展の様子、嬉しく拝見いたしました。連句は付けと転じのメカニズム、三句がらみが多々有る様に思いました。(KKさん)

●アゼリアが咲き初めて、「あぜりあ」連句会報も楽しく揺れていますね。(TKさん)

●「あぜりあ」ありがとうございます。お勉強の中にもおしゃれさと遊び心がいっぱい楽しい会ですね。みなさまのますますのご盛会をお祈りしております。(SKさん)

●「あぜりあ」六号届きました。連句も高橋さんの自由詩もテルツァ・リーマも素晴らしい！春水、一有、龍一さんの伸び伸びの姿が目につかびます。(MSさん)

●ご健吟ですね。そのうちまたぶらつと寄らせて頂きます。(WTさん)

●連句会の会報いつもありがとうございます。商店街に新しく飲み屋が開店したとか。活気が戻るといいですね。(KTさん)

□□編集後記□□

●八月の定例の連句会はお休みとします。その代わり文音で歌仙を巻きます。今までに野田連句会に来て頂いた方々にも付けをお願いすることになります。

●世話人のひとりである木之下みなみ(本名木之下みゆき)さんが「現代俳句千葉」112号に発表したエッセイを転載した。名エッセイである。ぜひお読み下さい。(龍一)

野田連句会は、原則として、毎月第一月曜日午後一時半より、野田市市民会館で定例の連句の座を設けております。詳しくは090・5573・4761(松澤)或いは090・5769・7649(木之下)まで